

マチカネワニ——伝説が科学となった時



夢はバラ色

伊藤 謙*

Machikane Crocodile - When legend became science

Key Words: Machikane Crocodile, Kazunosuke Masutomi, natural monument

大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館三階展示室には、一体の巨大な化石がガラスケースの中で静かに眠っている。全長約七メートル、推定体重約一トン。約四十五万年前の大阪平野を悠々と泳ぎ、人類がまだ姿を現す以前の地球を生きた巨大なワニ——マチカネワニである。その骨格は驚くほど完全で、頭蓋骨の保存率は九割を超える。大阪大学のこの博物館は、まさにマチカネワニの「墓」と言うべきであろう。

この化石が発見されたのは辰年の一九六四年。大阪大学豊中キャンパスの理学部棟の造成工事中、地層の中から現れたその姿——実際には骨の一部であったのだが——を最初に見つけたのは、当時まだ予備校生だった一人の化石愛好家・人見功である。彼の背後には、益富地学会館を創設した益富壽之助博士の存在があった。博士は薬学博士でありながら、鉱物・化石・漢方生薬学にまたがる広範な自然観を持ち、自然を「生命の辞典」として読み解く人であった。

益富博士はまた、優れた教育者でもあった。博士が人見青年に教えたのは「地学のリテラシー」である。すなわち、「化石や鉱物は個人の所有物ではなく、人類共通の財産であり、死蔵せず公開し、研究に資すべきである」という理念であった。その教えに従い、人見氏は友人とともに発見した化石を大阪市立自然史博物館の準備室に持ち込み、そこから大阪大学に連絡が入り、正式な発掘隊が組織された。こう

してマチカネワニの発見は公的な学術的成果として記録されたのである。

この経緯は、単なる偶然の発見ではない。益富博士が培った「科学の市民化」の理念の具現化である。学問が専門家だけの閉じた世界でなく、教育と共有を通じて社会に開かれていたからこそ、この発見は成し遂げられた。マチカネワニの物語は、「地学教育のリテラシー」が生んだ成果であり、裾野の広い科学教育の重要性を雄弁に物語っている。

私は十歳の頃から益富博士に師事した。博士が創設した益富地学会館で、標本観察や野外採集に連れて行って頂き、博士の語る「自然を総合的に理解する学問」——すなわち本草学の精神に触れた。博士は江戸時代の学問、とくに鉱物学や古生物学、そして考古学の原点とされる「奇石」を明治以降初めて学問的に研究し、その成果を正倉院石薬研究にまで昇華して、京都大学で博士号を取得した。

博士は常に、鉱物や化石、植物をそれぞれの生命史の中で、そして歴史の中に生きた人々の営みと共に捉えようとした。自然とは単なる対象ではなく、人間の文化や信仰、技術の記憶と連続して存在する——それが博士の確信であった。そして博士の創設した益富地学会館は、その理念を体現する場所であった。そこでは資料が「触れる」博物館であった。ガラスケース越しに眺めるのではなく、実際に手に取り、質感と重みを感じる。標本は単なる展示物ではなく、生命と時間の記録であり、五感で感じ取ること初めて語りかけてくる。私はこの環境の中で、少年としての好奇心を、学問としての直観へと育ててもらった。コレクションを集めるという行為が、やがて研究へと変わり、研究がまた新たな発見を生む。この循環の中で、私はコレクターとして、そして研究者として開眼した。以来、私は四十年近くにわたってコレクションと研究をやめたことがない。



* ken ITO

1978年3月生まれ
京都大学大学院薬学研究科博士後期課程
薬科学専攻 平成23年単位取得退学
現在、大阪大学総合学術博物館 招聘准教授
京都大学博士(薬学)
E-mail: itoken.handai@gmail.com

奇しくも私は博士と同じ京都大学薬学部で博士号を取得し、博士と同様に京都薬科大学、そして大阪大学にも勤めることとなった。博士が拓いた学際的な自然科学の道を、私は半世紀を経て再び歩んでいる。

マチカネワニの学名 *Toyotamaphimeia machikanensis* は、古事記の海神の娘・豊玉姫（トヨタマヒメ）に由来する。豊玉姫は「鱈（ワニ）の化身」として知られ、人間の夫との間に子をもうけたという伝承をもつ。この名を与えたのは青木良輔氏である。

青木氏は関東の有力な家に生まれ、幼い頃から生物学に強い関心を抱き、高校生の時には自宅で実際にワニを飼育していた。解剖学の指導を受けた恩師は、藤原定家の末裔にあたる冷泉家の縁戚であり、青木氏は古典籍や古代思想にも深い造詣を持っていた。科学的観察と文学的感性を兼ね備えた稀有な人物であり、青木氏とは生前、幾度となく電話で深い対話を重ねた。

その会話は、古代日本の神話における「鱈」の語義から始まり、化石記録の地質的分布、生薬学、産業や仏教思想にまで及んだ。氏の語る一つひとつの言葉が論文になりうるほど深く、しかもどこか詩的であった。彼の話には「学問は魂の表現である」という信念が滲んでいた。

青木氏がマチカネワニを新属新種と見抜いたのは、高校生の頃に東京でそのレプリカを見たときだったという。既知のどのワニ類とも異なる頭骨の形態を一目で見抜き、直感的に「これは新しい系統だ」と確信した。その洞察力はまさに天才的であり、のちに学術的検証を経て命名に至った。彼の中では、科学的検証と神話的記憶が同一の文脈で息づいていた。

命名の背景には、古代人の記憶を科学で再構築するという壮大な構想があった。豊玉姫という神話が伝える「ワニの女神」は、人とワニが同じ空間に生きた時代の記録である——青木氏はそう考えていた。つまり、伝説とは空想ではなく、実在した共生の記憶の象徴なのである。

青木氏は、古代日本において「辰（龍）」という十二支の中で唯一実在しないとされてきた動物に注目していた。十二支はもともと動物暦でありながら、なぜ「辰」だけが想像上の存在なのか。氏はそこに、かつて実在した巨大なワニが文化的記憶として変容した痕跡を見ていた。すなわち、辰とは「龍」であ

り、「龍」とは、かつて人々の目に映った巨大な爬虫類——すなわちワニであったのではないか。人々が恐れと敬意をもってその姿を神格化し、やがて神話の中で「龍」と呼んだのだ、と。

この「辰＝龍＝ワニ」という仮説は、長らく伝説の域を出なかった。しかし二〇二二年、中国南部の青銅器時代の遺跡から発見された大型ワニ *Hanyusuchus sinensis*（ハンユスクス）の骨には、青銅器による明確な切断痕が残されていた。人間とワニが同じ社会空間で生き、時に闘い、時に崇拜の対象として祀られていたことを示す決定的証拠である。つまり、青木氏の「龍＝ワニ説」は、二十一世紀に入って初めて考古学的に実証されたのである。青木氏の命名した「豊玉姫のワニ」は、神話と科学、想像と実在のあいだに架けられた一本の橋であった。

ハンユスクスの発見こそが、青木氏の語っていた「人とワニの共存を示す証拠」そのものであった。青木氏は生前、この標本の存在について情報を得ていたが、国際的な制約もあり、自らの手で確認することは叶わなかった。ハンユスクスの骨には青銅器による切断痕が刻まれ、人間がワニを畏れ、同時に祀り上げ、時には闘った——その生々しい記録が残されていた。翌年、台湾からは同属の新種 *Toyotamaphimeia taiwanicus* が報告され、マチカネワニ属が東アジア広域に分布していたことが明らかとなった。

こうして「豊玉姫のワニ伝説」が単なる物語ではなく、古代東アジアの自然と人間の共生の記憶に基づくものである可能性が、科学によって証明されたのである。まさに、伝説が科学によって真実とわかった瞬間であった。青木良輔という一人の在野の研究者の洞察が、半世紀を経て科学によって裏づけられたのである。

伝説が科学に裏づけられたとき、学問は単なる理性の営みを超え、人間の精神文化の根幹に触れる行為となる。科学とは伝説を切り捨てるための刃ではなく、時の地層に埋もれた真実を掘り起こすものであるのだ。

天然記念物指定のための意見具申書には、この点が明記されている。これは指定後も日本国が存続する限り残るものである。多くの推敲を重ね、科学的精密さと歴史文化的記載を両立させつつ記されたものである。伝説を扱うことへの躊躇もありつつも、

命名者の意図を無視することは、この化石の本質を見誤ることになるとの考えのもと、あえて「伝説が科学により真実とわかった」と記されている。

この一文は、単なるレトリックではない。人類と自然の共存の歴史を象徴する哲学的宣言である。科学が神話を証すとき、人はようやく歴史の中の自分を理解し始める。そして、「豊玉姫」という古層の神を人は知るのである。古事記を皆が知っているが、その内容や神の名は、ほとんどが忘れられている。私たち日本人の祖先にも関わらず。それを、何とかしたかったのだ。

発見者も命名者も「在野の人間」という奇しき歴史を有するマチカネワニ化石であるが、益富博士の弟子である「薬学博士」の私が天然記念物登録に尽力をさせて頂いたという稀有な歴史をまた刻むことができた。

私は現在、この化石を軸に全国の古生物学的天然記念物との連携を進めている。私と共にマチカネワニ化石調査委員会のメンバーである高橋啓一氏が発

掘から研究、そして天然記念物登録までを行った滋賀県のアケボノゾウなどの共同企画を構想しており、学術を超えた文化的ネットワークを形成しつつある。それは益富博士の掲げた「学問を社会に還元せよ」という理念の延長であり、また青木氏の「神話を学問で照らす」精神の実践でもある。

マチカネワニは単なる化石ではない。人と自然、科学と神話、過去と未来を結ぶ象徴である。私はその前に立つたびに思う——夢とは現実の彼方にあるものではなく、現実の中に眠るものだと。

展示室でマチカネワニ化石の実物を見る方には、正直を言うと言葉は必要ない。その存在そのものが心を動かす。その心の動きの、その瞬間、数十万年前の生命と現代の人間の心が交わる。研究とは、時空を越えて、その交点を見出す営みであると強く思う。

マチカネワニ化石は、令和七年（2025年）九月十八日付けで国の天然記念物に正式指定された。

